

「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

弊社理事 石井正文(元駐インドネシア日本国大使)による
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第80回: バイデン政権下の米中関係

2024年9月26日配信

- 来年1月に任期満了になるバイデン政権の対中政策を総括すると、米国内の超党派的な対中感情悪化を背景に、前トランプ政権の対中経済関係引き締め(強硬策)を引き継ぎ、部分的には強化する一方、対中対話自体に反対する勢力の各種横やりを受けて紆余曲折がある中で、間断なき対話を通じた関係のマネージメント(「ガードレール」の設定、関係の「底が抜けない」配慮)を行ったものと評価される。
- 日本として注意すべきは、米中間の各種対話は日中間以上に頻繁かつ率直な形で行われており、意思疎通のレベルは日中に比べて非常に高いと思われること。換言すれば、大きな方向性において、米中関係が突然劇的に改善する可能性は高くないと思われるが、個別課題において米国が中国との調整を優先し、日本が置いて行かれる危険性があること。
- ということは、代えられない隣国である中国との関係を、日本がこれまで以上に主体性を持ってマネージしていく必要性が高まっていると認識すべき。
その観点からは、日中間のハイレベルの対話実施は極めて重要。本年11月のブラジルG20、ペルーAPEC首脳会合の機会には、米中首脳会談を行なう方向で準備が進んでいるようであり、日本側も、新総理の最初の日中首脳会談実現に向けて、しっかりと準備を進めるべし。歴史を見ても、共に大国のDNAを持つ米中両国は、「底流」で繋がっていることを忘れるべからず。

【本文】

- バイデン政権では、経済面では中国に対するトランプ時代の厳しい対応を基本的には引き継いでいるだけでなく、一層強化していると言える。関税は高止まりし、半導体、スパコン等を中心とした機微技術の規制(いわゆるSmall yard High fenceはBig yard High fenceになりつつある。)は同志国との連携により益々厳しくなっており、対中投資審査も厳格化している。また、米国金融規制当局は証券市場の公開ルールに従わない中国企業の上場廃止に向けて対応しており、大統領府は米国起源全技術に厳しい輸出規制を課す「外国直接生産ルール(FDPR)」の適用も進めている。



■一方、米中政府の対話は間断なく進められている。

■至近では、昨年11月にサンフランシスコで行われた米中首脳会談で、米中関係を安定させ両大国の競争が紛争に結びつかないようにするための努力の一環として、両軍の連絡チャネル再開に合意したことを受けて9月10日に米インド太平洋軍司令官パパロ提督は呉亜男人民解放軍南部戦区司令官とビデオ会議をした。これは、2022年8月にペロシ下院議長が米下院議長としては25年ぶりに台湾を訪問したことに抗議し、中国側が閉鎖した現場レベルでの連絡ルートの再開。

■軍軍チャネルは、昨年12月に、サンフランシスコ首脳会談の合意を受け、ブラウン統合参謀本部議長と中劉振立統合参謀部参謀長がビデオ会議したことで再開されていたが、今回の会談は、実際上の危機管理に直接かかわる現場レベルでの対話再開と言う意味で重要。

■本年に入ってから両軍は、5月のシャングリラダイアログの際のオースティン国防長官と董軍・中国国防大臣の会談を含め、多くの関与を実施してきたが、パパロと呉の電話会談はこの2人の司令官の初めての対話であり、特に重要。米国防省は、ここ数か月間のフィリピンに対する敵対行為を含め、最近中国が南シナ海での敵対行為を先鋭化させていることもあり、長きに亘り両司令官の電話連絡実施を働きかけてきた。これ自体は、危機管理に向けて最重要な現場の軍の当事者間の意思疎通を改善するもので、高く評価される。

■以下、バイデン政権下の米中間の意思疎通の過程を振り返ってみたい（以下は、主に、匿名の米国政府高官とのインタビューに基づく8月25日付FTの記事による。）。米中高官対話は間断なく行われていることが良く分かる。

・2021年1月バイデン政権成立

・21年3月；アラスカで両国政府高官（米側；ブリンケン国務長官、サリバン大統領補佐官、中国側；楊潔共産党政治局員、王毅国務委員兼外相）の初顔合わせ。プレスの前でTiger Yangの異名を持つ楊潔・とブリンケンとの間で説教調の異例の厳しいやり取りがあり、バイデン政権下での米中関係の管理の困難さを示した。

・22年8月；現役米下院議長としては25年振りのペロシ下院議長訪台。

中国側は大規模演習実施を含め激烈に応じた。

・22年9月；ブリンケン・王毅会談@NY国連総会；この際には、ローゼンバーグNSC中国上級部長＋クリンテンブリック国務次官補と謝鋒 外交副部長の裏チャネルが機能

・22年11月；インドネシア・バリのG20首脳会合で米中首脳会談。米中関係管理のためにガードレールを設定し、「底が抜けぬ」ようにすること、そのために「戦略的対話チャネル」を立ち上げることに合意。関係緩和への期待上昇。

- ・23年2月；中国の偵察気球が米国上空で発見・撃墜され、その直後に予定されていたブリンケン国務長官訪中延期。
- ・23年5月サリバン-王毅第一回秘密会談@ウィーン；サリバン国家安全保障担当大統領補佐官と楊潔・の後任として2022年10月の共産党大会で国務委員になった王毅との間の秘密チャネルの初会合。
①台湾問題、②米国の意図（競争か共存か）、③輸出規制問題を中心に、プレスの目に触れないためにもホテルに缶詰めになり、2日で8時間に及ぶ率直で詳細な対話[含む4+4夕食会]を実施。
楊潔・と王毅はどちらも自己主張は強硬だが、そのスタイルにおいて「性格」の違いがあり、サリバンと王毅とのケミストリーが（楊潔とに比べ）悪くなかったこともあり、この対話がその後の米中関係管理主舞台に（バリ首脳会談で立上げに合意した「戦略的対話チャネル」と位置づけ）。
- ・23年5月；米中国防大臣会談@シンガポール・シャングリラ対話時
- ・23年6月；ウィーン会合の議論を受けて、延期されていたブリンケン訪中が実現。
- ・23年7月；イエレン財務長官訪中
- ・23年8月；レイモンド商務長官訪中
- ・23年9月；第二回サリバン・王毅秘密会合@マルタ；11月のサンフランシスコAPECサミットの際の米中首脳会談実施に向けた地ならし開始。
- ・23年10月；王毅訪米；サンフランシスコでの米中首脳会談実施が実質的に決定。
本稿冒頭で触れた軍司令官間のチャネル連絡についても、サンフランシスコ首脳会談で合意することに。
- ・23年11月；サンフランシスコ米中首脳会談；軍軍チャネル再開等に合意
- ・23年12月ブラウン統合参謀本部議長と中劉振立統合参謀部参謀長がビデオ会議
- ・24年1月；第三回サリバン・王毅秘密会談@バンコク；今秋の首脳会談実施調整開始
- ・24年4月；イエレン財務長官訪中
- ・24年8月；サリバン訪中；中国中央軍事委員会副議長、張又俠将軍と異例の会談
- ・24年9月；米インド太平洋軍司令官パパロ提督と呉亜男人民解放軍南部戦区司令官がビデオ会議
- ・24年11月；ペルーAPECかブラジルG20のどちらかで米中首脳会談実施予定

以上

りそな総合研究所 理事 石井正文